

4. 現存する資料

(1) 写真・絵図・文献

藩政時代の歴史や盛岡城の普請に関する記録については、大半がもりおか歴史文化館に保管されており、『盛岡藩家老席日記雑書』(寛永21年(1644)～天保11年(1840)年)の197年間の記録のほか、『御城廻御修補』や『老中連署奉書』などの史料により、石垣普請や城内建物の建築等の傍証を得ることができる。

城絵図や城下図等の多くについてももりおか歴史文化館に所蔵されており、おおまかな城郭・城下の構造を知る傍証となるが、建物の構造や寸法がわかる指図等については確認されていない。写真については明治初期に城の西側(菜園側)から、本丸隅櫓(三重櫓・二階櫓)、二ノ丸大書院の一部、腰曲輪の吹上門や塀、坂下門(川口門)が写っているものが1枚確認されているのみである。

その他、現在までに確認できた史料の所蔵先としては、以下の箇所が挙げられる。

- ①岩手県立図書館 ※番号は40・41頁表5中の所蔵部分に対応
- ②国立国会図書館(内閣文庫)
- ③国立国会図書館(稲垣家旧蔵)
- ④東北大学附属図書館(狩野文庫)
- ⑤八戸市立図書館・八戸市史編纂室(宗(糠塚)家文書)
- ⑥八戸市立図書館・八戸市史編纂室(接待(妙)家文書)
- ⑦十和田市十和田湖図書館
- ⑧金沢市立玉川図書館近世資料館(前田育徳会尊経閣文庫)
- ⑨永福寺
- ⑩盛岡山王美術館(休館中)
- ⑪白杵市立図書館

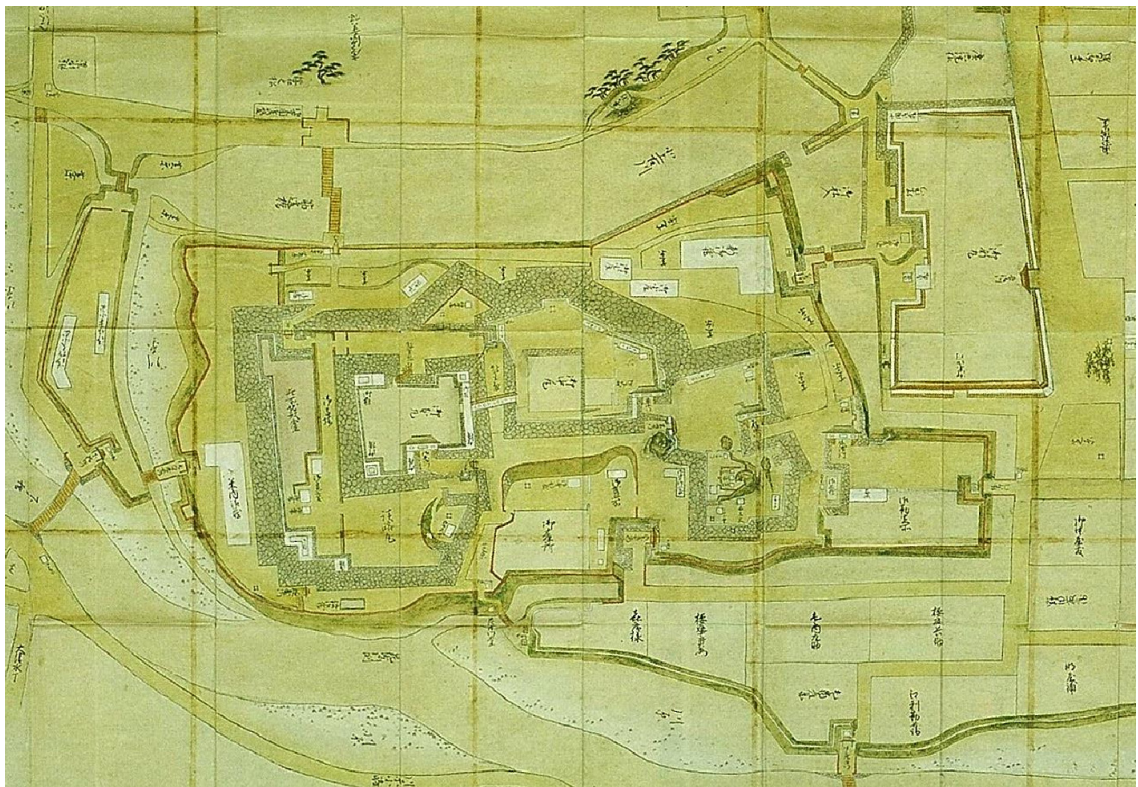


盛岡城古写真(明治初期 個人蔵)

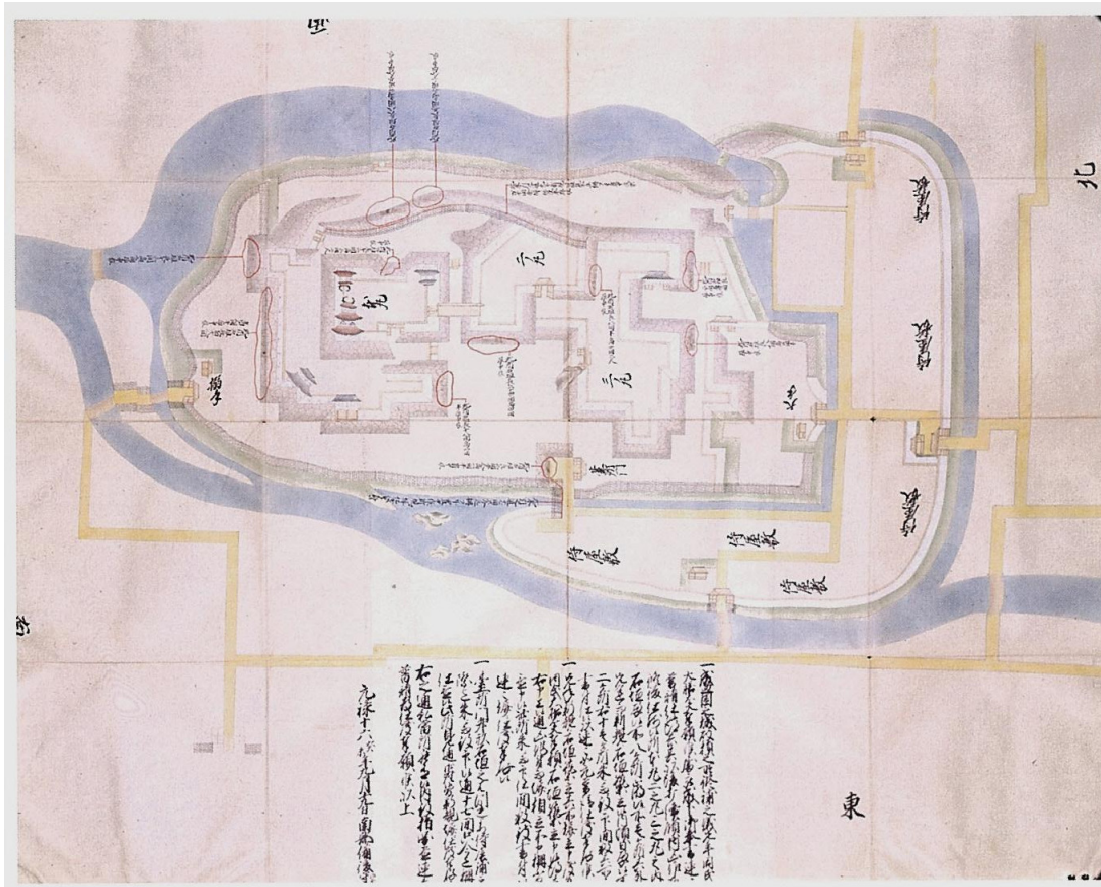
絵図（城絵図・城下絵図）



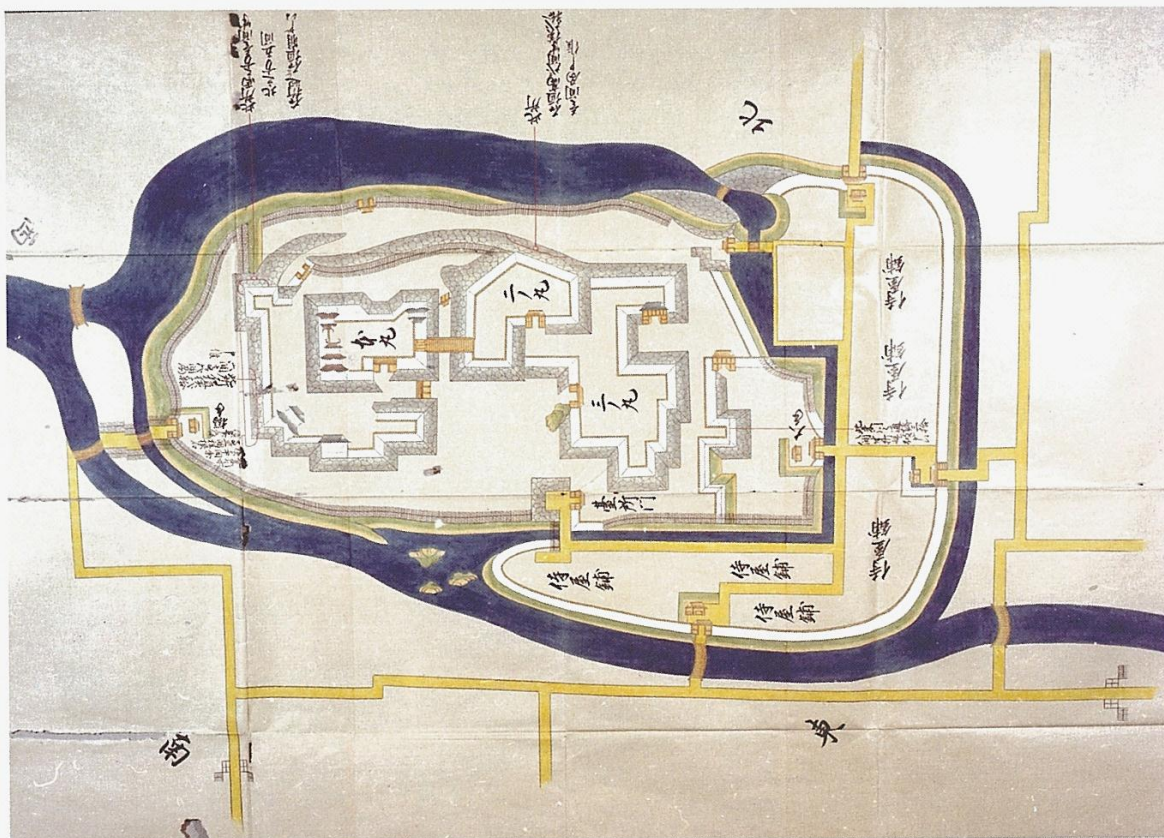
寛永盛岡城図（もりおか歴史文化館 収蔵）※絵図右側が北



明和三年書上盛岡城図〔部分〕（もりおか歴史文化館 収蔵）※絵図右側が北



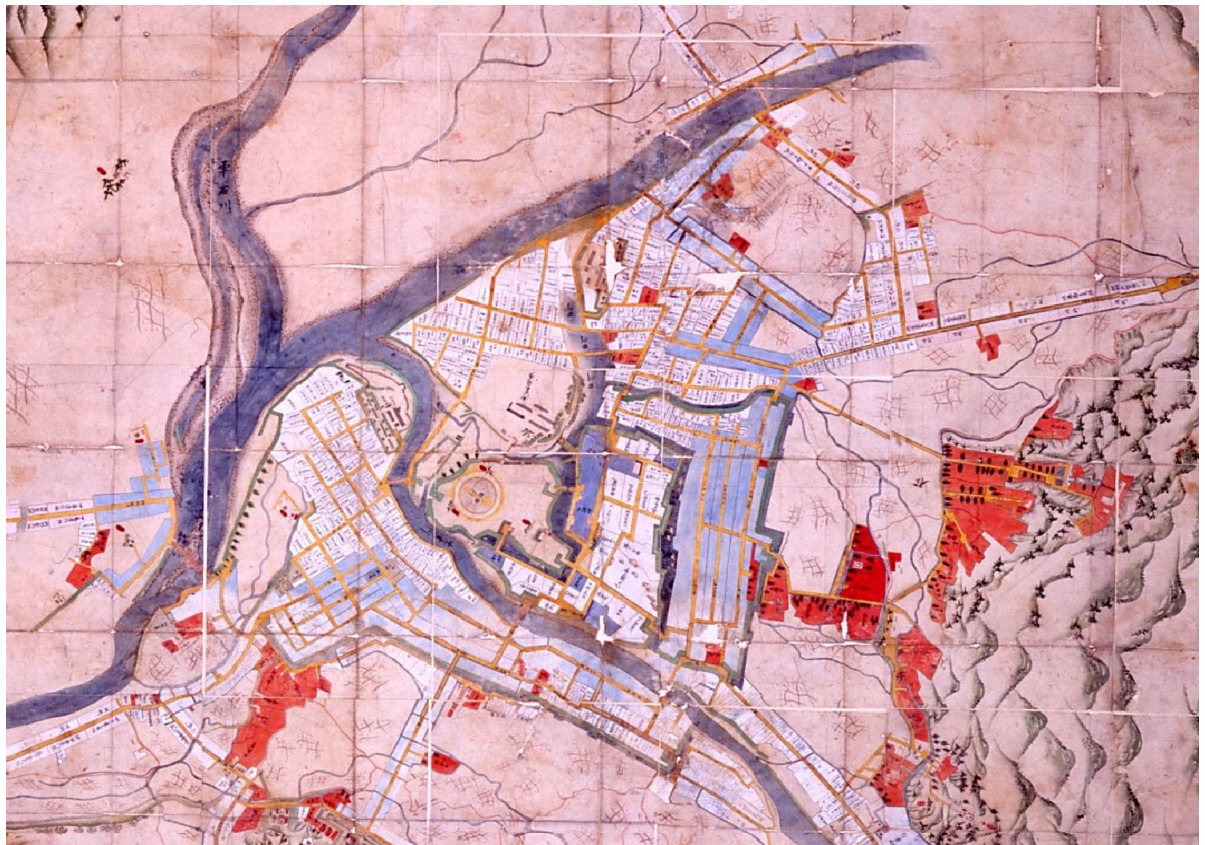
元禄 16 年普請伺絵図 (もりおか歴史文化館 収蔵) ※絵図右側が北



元文 5 年普請伺絵図 (もりおか歴史文化館 収蔵) ※絵図右側が北



伝寛永盛岡城下図〔部分 正保年間〕（もりおか歴史文化館 収蔵）※絵図右側が北



寛延盛岡城下図 （もりおか歴史文化館 収蔵）※絵図右側が北

表5 盛岡城関連絵図一覧

所蔵	資料名	年代	概要等
もりおわか歴史文化館	盛岡城内図	江戸時代	作成年代不明、城修理願に添付する図面の未使用残、修理予定箇所5ヶ所表示、蔵書印なし
	盛岡城内図	江戸時代	作成年代不明、城修理願に添付する図面の未使用残、修理予定箇所5ヶ所表示、蔵書印なし (上記資料と同一名称・内容であるが、絵図の大きさが異なる)
	盛岡城明細図	江戸時代	作成年代不明、本丸二ノ丸の部屋名詳細に記載 藩主御居間を黄色、大奥を茶色で表示、三階隅櫓を御天守と表現、南部家蔵書印あり
	盛岡城本丸図	江戸時代	作成年代不明、本丸大奥部分の絵図 部屋名等詳細に記載あり、朱書き部分は増改築予定か?南部家蔵書印あり
	盛岡城本丸図	江戸時代	作成年代不明、本丸大奥部分の絵図 部屋名等詳細に記載あり、朱書き部分は増改築予定か?蔵書印なし (上記資料と同一名称・内容であるが、絵図の大きさが異なる)
	盛岡城本丸図	江戸時代	作成年代不明、本丸大奥部分の絵図、部屋名等詳細に記載あり、朱書き部分は増改築予定か? 南部家蔵書印あり
	盛岡城本丸建物平面図	江戸時代	作成年代不明、部屋名のみでなく形状、素材など詳細に記載あり、部屋の模様を表示した貼札2ヶ所あり 三階隅櫓は御三階と表示、南部家蔵書印あり
	盛岡城二ノ丸建物平面図	江戸時代	作成年代不明、部屋名等詳細に記載あり、貼札1ヶ所、蔵書印なし
	盛岡城内建物図	江戸時代	(盛岡御城大絵図)本丸~三ノ丸の建物配置及び間取りが記載 西側石垣上端に柵が表現される
	盛岡城跡本丸平面図	江戸時代	本丸の間取り 部屋名の記載はあるが、広さの記載は無し
	伝寛永盛岡御城之図	江戸時代前期 正保2年(1645)	石垣の高さ・長さ、本丸・二ノ丸・三ノ丸の広さ、堀の深さ・幅などの表示あり 色彩きれい、南部家蔵書印あり 本丸には三階隅櫓なし、二階隅櫓のみあり
	伝寛永盛岡御城図	江戸時代前期 正保2年(1645)	石垣の高さ・長さ、本丸・二ノ丸・三ノ丸の広さ、堀の深さ・幅などの表示あり 色彩きれい、南部家蔵書印あり、「寛永盛岡図之内 御城之図」とあり 本丸には三階隅櫓なし 二階隅櫓のみあり
	盛岡城図	江戸時代中期 元禄16年(1703)	幕府に提出した石垣修理願に添付した絵図面の控え、修理願箇所11ヶ所、南部家の蔵書印あり 「元禄十六年癸未年九月十九日 南部備後守 御印判 御居判」とあり
	盛岡城本丸二ノ丸図	江戸時代中期 宝永2年(1705)	幕府に提出した石垣修理願に添付した絵図面の控え、修理願箇所2ヶ所、南部家の蔵書印あり 「宝永二年癸酉年五月朔日 南部備後守 印判 花押」とあり
	元文盛岡城下図	江戸時代中期 元文年間(1736~41)	盛岡藩の事業で元文元年(1736)に作成着手、元文3年(1738)段階の様子を表現 個人蔵と2本あり、城内表現(天守櫓・二階櫓)あり
	盛岡城図	江戸時代中期 元文5年(1740)?	作成年代不明、幕府に提出する城修理願に添付する図面控の未使用分 修理予定箇所5箇所、南部家の蔵書印あり 修復予定箇所とその内容から元文5年(1740)の普請何絵図の控図と考えられる
	寛延盛岡城下図	江戸時代中期 寛延年間(1748~51)	寛延2年(1749)段階の城下の様子を表現、城内詳細表現なし
	増補行程記	江戸時代中期 宝暦元年(1751)	門・枳形や城下町の様子が描かれている 城内では下曲輪の一部が描かれている
	盛岡城図	江戸時代中期 明和3年(1766)	本丸・二ノ丸・三ノ丸の他に御新丸・家老席屋敷・御菜園場・桜御馬場などを描写 「明和三年戊三月下斗米小四郎認指上之」とあり、南部家蔵書印あり
	勘定所図	江戸時代中期 寛政6年(1794)	寛政6年(1794)の勘定所建替の際に書かれた間取り図 部屋名や間数が記入されている、南部家蔵書印あり
	盛岡城本丸二ノ丸三ノ丸建物平面図	江戸時代後期?	作成年代不明、藩主御居間は黄色、大奥は茶色で表示、御居間に1箇所、大奥に6箇所、二ノ丸に2箇所貼札あり 貼札は増改築予定箇所か? 三階隅櫓は御天守と表示、淡路丸に聖長楼の貼札あり、作成年代は12代藩主南部利齊(文政8~)公の時代か?
	盛岡城御規式儀礼図	江戸時代後期 天保13年(1842)	盛岡城内の儀礼作法を図にしたもの 二ノ丸玄関・広間・大書院等における用法が記され、部屋の規模を知ることができる資料
	盛岡城下図 (天保盛岡図)	江戸時代後期 弘化3年(1846)	内容的には元文図を基本に描かれたもの 屋敷の名前は内丸の重臣のみ、寺社名が詳細に表現される、城内詳細表現なし
	盛岡城下古絵図	幕末 安政年間(1854~60)	川井鶴亭の作、城下を南側上空から鳥瞰した絵図 本丸建物のほか、遠曲輪の堀や中津川3橋等、城下町の構成がわかりやすく表現されている
	菜園図	幕末 安政3年(1856)	盛岡城西側の菜園の図、周囲を囲む柵や畑等が表現される
	御新丸図	幕末 文久3年(1863)	部屋名・広さなどが詳細に記載されている、星川正甫の絵図説明が右上段に書き込まれる、南部家蔵書印あり
	城下及近在図	幕末 慶応年間(1865~68)	慶応元年(1865)に測量された絵図、城下と周辺の村とを表現した盛岡全図、城内詳細表現なし
盛岡城・馬場小路・下小路御菜園図	明治期	狩野存信が明治期に描いたもの 中津川を挟んで南側からの構図、三層の天守と二層の隅櫓が描かれている	
明治内丸地図	明治期	櫻山神社が遷座されていないことから明治32年以前のもの 門・土塁・枳形が表現される	
旧盛岡城ノ内拝借願 絵図面	明治期	作人館中学校建設に伴う図面、縮尺1/600で着色 明治23年頃のものと思定される	
①	盛岡城下内丸屋敷図	江戸時代前期	題せんには『盛岡内丸大手先附近屋敷図』とあり

所蔵	資料名	年代	概要等
①	霊承院様御代大奥御住居図	江戸時代後期 文政～嘉永年間 (1818～54)	本丸部分の殿舎を描く、西側中央には「生長楼（聖長楼）」とそれに接続する百足橋の位置に三階建ての懸造りが見られる、表題は南部利済の法号
	盛岡城下図(伝寛永盛岡城下図)	江戸時代後期	原図は江戸前期絵図、正保2年段階の図の写本
	盛岡古図	江戸時代後期	「正保図」と称し、原図は江戸前期絵図 江戸後期写本
	慶長盛岡図	幕末 安政年間(1854～60)	『慶長年間之御城下絵図面 安政5年(1858) 午5月町会所用ニ写置之』とあり
②	南部領盛岡平城絵図	江戸時代前期 正保年間(1644～48)	国重要文化財 正保元年(1644)に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町の地図 本丸に天守櫓・二階櫓なし
③	奥州盛岡城図	江戸時代中期～幕末	二ノ丸西側に石垣が表現されていない 内曲輪にはそれぞれ門が表現され、周囲の屋敷の配置なども表現されている
	奥州盛岡城図	江戸時代中期～幕末	宝永2年(1705)作成の盛岡城普請何絵図と同様の構図 二ノ丸西側に石垣が表現されているほか、本丸の二層櫓・三層櫓・塀・門が表現されている
④	南部盛岡城図	江戸時代	坂口某の写し、彩色本
	南部城内沿革図	江戸時代後期 文化13年(1816)写	外曲輪の重臣屋敷の配置を描いたもの
⑤	盛岡城下図	江戸時代	盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している 内曲輪については、櫓・門及び蔵が描かれ、外曲輪については、御新丸と重臣屋敷の配置が描かれる
	盛岡城下図	江戸時代	盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している 内曲輪については、櫓・門及び蔵が描かれ、外曲輪については、御新丸と重臣屋敷の配置が描かれる 塗色無し、描かれている城郭の構造は、元文年間の普請何絵図と類似している
	盛岡城下図	江戸時代	盛岡城下の通りや道路網を描いているもの 寺院等の配置のほか、城内を出入りする門や主要な街道に設けられている枡形の位置等が記されている
	陸奥州森岡城図	江戸時代	加治縫殿助写とあり、国立国会図書館蔵の「奥州盛岡城図」と同様の構図 盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している 二ノ丸西側に石垣の表現が無いこと、内曲輪の西側に北上川が表現されていることから、江戸時代中期以前の盛岡城を描いたものと考えられる
	盛岡御城御絵図面	江戸時代後期 天保15年(1844)	八戸藩主の南部信順公が、参勤交代の途中で盛岡城内に立ち寄った際の行程について記したものの 城内の各門の位置のほか、駕籠を降りる位置や同行者の待機場所等の指示が図面に記されている
⑥	盛岡城勘定所絵図	江戸時代後期 天保11年(1840)	寛政6年(1794)に建替えられた勘定所の間取り図 部屋名が記入されている
	盛岡城下図	江戸時代 幕末?	盛岡城の内曲輪及び外曲輪を表現している 内曲輪については、櫓・門及び蔵が描かれ、外曲輪については、御新丸と重臣屋敷の配置が描かれる 描かれている城郭の構造は、元文年間の普請何絵図と類似している 宗家文書にも同じ内容が描かれている絵図が存在するが、この絵図についてはは塗色がなされている
	盛岡城下図	江戸時代 幕末?	表現されている事項は上記絵図面と同様 外曲輪の屋敷地については、全ての建物屋根に鯺瓦が表現されているほか、本来は石垣が存在しない箇所にも石垣が構築されているように表現されている
⑦	寛延盛岡城下図	江戸時代後期 弘化2年(1845)	工藤利悦氏の調査により、寛延2年(1749)段階の城下の様子を表現したものと判断された 城内詳細表現なし
	御領内鬼柳より田名部迄道中図	幕末 安政3年(1856)	盛岡領の南から北端まで描かれているもの 城下のみ折込図により大きく描かれ、三層の天守と二層の隅櫓が描かれている
⑧	奥州盛岡城図	江戸時代前期 寛永年間(1624～44)	本丸に「寛永13年9月 日火事にて家なし」の注記あり
⑨	寛延盛岡城下図	江戸時代中期 寛延年間(1748-51)	寛延図は、寛延2年(1749)段階の城下の様子を表現 城内詳細表現なし
⑩	天守櫓瓦葺絵図	江戸時代	三階櫓の外観見取図と瓦葺き墨引図
⑪	奥州南部盛岡城図	江戸時代	城下絵図、注記に「大沢川原町水ニテ流」「同年之水ニテ崩申候」等、洪水関係の記述があるもの
	奥州南部盛岡	江戸時代	城下絵図、注記に「大沢川原町水ニテ流」「同年之水ニテ崩申候」等、洪水関係の記述があるもの (上記資料と同じ内容のものであるが、絵図の大きさが異なる)
個人蔵	伝寛永盛岡城下図	江戸時代前期 正保2年(1645)	屋敷名から正保2年の調査、幕府提出の正保城絵図とは別本 本丸天守櫓、二階櫓なし
	元文盛岡城下図	江戸時代中期 元文年間(1736～41)	元文図は盛岡藩の事業で元文元年(1736)に作成着手、元文3年(1738)段階の様子を表現 もりおか歴史文化館収蔵と2本あり
	盛岡城下図	江戸時代中期 寛延年間(1748～51)	寛延図の写しかと思われる
	六曲一双盛岡城下絵屏風	江戸時代後期 文化年間(1804～18)	本丸三階櫓のほか御殿の一部、腰曲輪の一部が表現されている
	盛岡城下町割図	幕末 慶応3年(1867)	安政図の写本、町名や寺社名を記載、元治2年(1865)の大火被災地表現 城内詳細表現なし
	盛岡城古写真	幕末～明治初期?	菜園方面より本丸・腰曲輪の西側が撮影されている

表6 盛岡城関連文献一覧

所蔵	資料名	著者	年代	概要等
もり お か 歴 史 文 化 館	旧記		江戸時代	加々美遠光から南部行信までの歴史を記述したもの
	盛岡城石垣普請願書		江戸時代	幕府に対し石垣や建物の作事について届出をした文書
	奥南盛風記 <small>おんなんせいふうき</small>		江戸時代	紀伝体の南部家歴代の記録
	信直書状	南部信直	近世 慶長3年(1598)	八戸千代子あて、豊臣秀吉より築城許可を得る見込みであることが記述されている手紙
	盛岡藩家老席日記 雑書		江戸時代前～後期 寛永21(1644)～天保11年(1840)	家老席の書記にあたる藩士が家老の政務日記として記したもの 盛岡藩の代表的な公的記録文書
	おしろまわりおんしゅうほ 御城廻御修補		江戸時代前～中期 寛文5(1665)～寛保3年(1743)	盛岡城石垣普請、建物作事記録
	老中連署奉書		江戸時代前期 元文5年, 寛文7年, 寛文13年, 延宝7年, 延宝8年, 天和2年, 貞享3年, 元禄16年	石垣や建物の修復等について、盛岡藩より幕府へ申請のあったものについて、幕府が許可する内容について回答している文書
	盛岡城間数並道改帳		江戸時代前期 正保4年(1647)	国絵図・城絵図を解説するための文書 盛岡城の規模等のほか、領内の地理の概要等が記されている
	南部中道規記	藤根吉当	江戸時代前期 元禄15(1702)年	絵図を解説するための文書、「盛岡城間数並道改帳」の類書 盛岡城の規模等のほか、領内の地理の概要等が記されている 内題「陸奥国南部領盛岡城絵図并陸地海上道規記」
	奥南旧指録 <small>おんなんきゅうしりく</small>		江戸時代中期	南部家歴代の記録
	祐清私記 <small>ゆうせいしき</small>	伊藤祐清	江戸時代中期 寛保年間(1741～44)	収集した古記録を基にして南部信直・利直父子の事蹟を中心に前後の歴史を記録
	盛岡城大手先御堀波御願		江戸時代中期 寛政12年(1800)	大手先の外堀2箇所が埋まったため、幕府に対し城(下)絵図を添えて修復の許可を願い出、許可を得るまでの顛末が書かれている
	郷村古実見聞記 <small>ごうそん こじつけんぶんき</small>	阿部知義	江戸時代中期 文化元年(1804)	検地、開墾、番所、土地境論など、筆者が在任中に見聞した経済史料
	聞老遺事 <small>ぶんろう いじ</small>	梅内祐訓	江戸時代中期 文政5年(1822)	南部家の事跡について記録
	岩 手 県 立 図 書 館	書拔(藩史草稿)		明治期
国統大年譜		四戸武虎	明治期	南部家が所蔵していた多種の古文書・記録を元に明治時代に編纂された年表
旧城木敷改扣 <small>きゅうじようき すう あらためひかえ</small>			明治24年(1891)	旧城地払い下げに関する記録
旧城地関係記録			明治23年(1890)	旧城地払い下げに関する記録
南部根元記		獅子内奎	江戸時代前期 寛永18年(1641)	南部家始祖から天正19年(1591)までの歴史書
奥州ノ内南部領盛岡城絵図の帳		一ノ倉某	江戸時代前期 慶安2年(1649)	盛岡城の規模等を記録、城絵図の説明書きと思われる
宝譜伝万莖 <small>ほうふでんまんけい</small>			江戸時代中期	歴代の事績、公儀への献上物控、初代信直ほか各藩主・一門の花押、盛岡藩領内郷村帳
宝翰類聚 <small>ほうかんるいしゅう</small>		伊藤祐清・円子記	江戸時代中期 寛保年間(1741～44)	藩士所伝の古記録をまとめたもの
奥州盛岡城并領内道規御書上写		本堂親岡	江戸時代中期 明和9年(1772)	正保国絵図・城絵図の解説書 盛岡城の規模のほか、領内の地理等に概要が記載されている 同様の資料がもりおか歴史文化館に所蔵されている
竹田加良久里 <small>たけだからくり</small>		持仏堂主人	江戸時代中期 文政6年(1823)	天明4年(1784)～文政3年(1820)までの盛岡藩の変遷史、風俗史
邦内郷村志		大巻秀詮	江戸時代中期 明和～寛政年間(1764～1801)	藩内の地誌、郡町村の石高・戸数・人口・社寺などを記録
篤篤家訓 <small>とくとくかこん</small>		市原篤焉	江戸時代中～後期 文化～天保年間(1804～44)	中世から近世に至る藩内の諸記録を編集
見聞随筆		横川良助	江戸時代後期	盛岡新山船橋記、岩手山の噴火、盛岡の大火など、盛岡藩関係の記録
奥々風土記		江刺恒久	幕末 嘉永～安政年間(1848～1860)	藩内の風土記をまとめたもの
参考諸家系図		星川正甫	幕末 文久年間(1861-64)	南部氏一門をはじめ、藩士2,700余名にも及ぶ所伝の家系図集
石垣組立秘伝写		江戸時代後期 寛政4年(1792)	盛岡藩御用職人平栗家に伝わる石垣技術解説書の写し。江戸の石垣師上田三郎右衛門より伝授された石垣技術を文章や図を交えて解説している。 現存するのは明治以降の写本。	
内史畧 <small>ないしりやく</small>	横川良助	幕末 安政年間(1854～60)	前編は、『奥南旧指録』『盛岡砂子』『登首草紙』等からの収録 後編は、藩の財政事情、百姓一揆、凶作など、後世に伝えるべき事柄を採録	

(2) 現存移築建築物（部材）等について（表7，第14図）

藩政時代より盛岡城内に残っていた建物，または城内から移築されたという伝承をもつ建築物は以下のとおり。

このうち④の彦御蔵については，城内に残る唯一の建築物であったが，都市計画道路下ノ橋更ノ沢線拡幅工事に伴い，史跡指定地外から移設されたものである。

表7 現存移築建築物等一覧（※○は伝承のみの確認）

	旧建物名称・旧位置	現在の名称（移築場所）	備考
①	御勘定所建物・下曲輪勘定所	徳清商店佐藤家住宅母屋 （盛岡市仙北一丁目）	盛岡市指定保存建造物
②	城門・（薬医門・旧位置不明）	清水寺山門 （盛岡市西見前）	御台所の門との伝承あり （都南村史）
③	城門・（薬医門・旧位置不明）	報恩寺の門（盛岡市名須川町）	
④	彦御蔵・腰曲輪西側下	彦御蔵・城内（公園内）に移設保存	旧米内蔵の位置に移設
⑤	綱御門	櫻山神社神門	部材を使用したとの伝承
⑥	土蔵（旧位置不明）	浜藤酒造店土蔵（盛岡市鉦屋町）	
⑦	土蔵（旧位置不明）	木津屋本店土蔵 （盛岡市南大通二丁目）	

※ 各建物は，解体修理調査などの詳細な調査が実施されていないため，盛岡城当時の状態をそのまま残しているものか不明。



第14図 現存移築建築物等（伝承地）位置図

5. 発掘調査

史跡指定地内では、昭和59年度から石垣修復工事等に伴う発掘調査を実施している。ここでは、石垣修理に伴い腰曲輪及び本丸・二ノ丸でおこなわれた発掘調査を中心に、公園施設整備や道路拡幅等に伴い、史跡地内及び隣接地でおこなわれた調査成果の概要について略述するものとする。

なお、調査成果の詳細については、盛岡市・盛岡市教育委員会（1991）『盛岡城跡Ⅰ－第1期保存整備事業報告書』、盛岡市教育委員会（2008）『史跡盛岡城跡Ⅱ－第2期保存整備事業報告書－』等の報告書を参照されたい。

（1）石垣修理に伴う発掘調査（調査範囲は48頁第15図）

①腰曲輪の調査（49頁第16図）

昭和59年度より平成2年度にかけて、腰曲輪の石垣修復に伴う発掘調査を実施し、不來方城期から盛岡城終末期（幕末）までの遺構変遷が把握されている。

不來方城期の遺構は2小期に分かれる。当初は基本的に等高線に沿うように曲輪を構成しており、南東部並びに南西部では外側に張り出し、中央の低地部分で本丸側に入り込んでいる構造であることが確認されている。次の段階は当初の構造を踏襲しているが、曲輪を嵩上げし曲輪を造成するとともに縁辺に土塁を構築している。

盛岡城1期には、不來方城期の曲輪にさらに盛土を施している。腰曲輪の南東部では盛岡城2期以降の腰曲輪と同じ高さまで盛土されているが、最終的に石垣の構築された西側では大規模な盛土は施されなかったようである。この時期には縁辺部に横矢掛りの折邪おりひずみを有する木柵を巡らせている。

盛岡城2期には腰曲輪上部に盛土が施されるとともに、法面下部を根切りして石垣が構築されている。この段階の腰曲輪には、南東部に櫓2棟があり、これらから西端の吹上門の枳形に至るまでは、石垣内側が土被りどかぶとなった幅3～4メートルの武者走りが巡っていた。さらに、この武者走り内側の範囲は東西98メートル、南北14メートル以上の大きな窪地となっており、幕末までの期間で徐々に平坦な地形に変化していった。

盛岡城3期以降は前述の窪地に盛土が施される一方、腰曲輪西端に櫓（※SB440）が構築されている。また、江戸時代後期以降には補修石垣（ハバキ石垣）が構築されたほか、曲輪内では武者走り内側の窪地の縮小とともに御宝蔵ごほうぞう（SB430）が構築された。

なお、盛岡城5期の盛岡城終末段階（幕末）になると吹上門西の櫓（SB440）が破却され吹上三社が建てられていることが確認された。※注）SB：建物跡を示す記号

②本丸の調査

i）北東部（50頁第17図）

平成5年度に石垣の上面と石垣背面部の調査を実施、平成6年度に石垣下層の遺構調査を実施しており、不來方城期から盛岡城終末（幕末）までの遺構変遷が把握されている。

不來方城期の遺構は、北東部斜面を廻る犬走りのほか、斜面裾の空堀が確認されている。犬走り、空堀ともに新旧2時期の変遷があり、古い空堀の埋土からは瀬戸饗窯期の鉄釉陶器、新しい空堀からは大窯期の灰釉陶器が出土していることから、それぞれ不來方城1期と2期に属する可能性が高い。犬走りや空堀は部分的な確認であったが、地形から盛岡城本丸の場所が不來方城の主郭と推定される。また、犬走りやそれに伴う斜面が本丸北面に回り込み、本丸・二ノ丸間の堀切は不來方城1期に存在し、不來方城2期や盛岡城1期～3期の縄張りも、この堀切を踏襲している。

盛岡城1期の遺構は、現在見られる2期の石垣根石の内側に埋め込まれた根石列が確認されたほか、不來方城期の空堀を埋めた面に2個一対の門柱（SB115）が確認され、門跡の東側には石垣が伴っていることが判明した。

当時の本丸は現在の本丸よりもやや狭かったが、本丸裏手の御末門に登る坂道と虎口は、2期・3期の縄張とも共通する。検出された石垣の石材は全て野面石である。

盛岡城2期～3期の石垣は現状の石垣である。1期の構造を外側に拡張して石垣を構築する。石垣の上面では、明治期に北東隅の櫓台が大きく削られていることが判明し、櫓台内側の石垣下部と、石垣の抜き取り痕跡が確認され、3間×3間の櫓台（SB130）平面が明らかとなった。また、本丸殿舎（SB101）の北東隅部の礎石が雨落溝を伴って確認され、本丸内部の建物の遺構が、良好に残存していることがわかった。この他便槽等の土坑、柱穴群などが確認された。

ii) 北西部 (51 頁第 18 図)

本丸北西部の発掘調査と石垣解体修復工事は、平成8年度に実施している。

不來方城期の遺構としては、盛岡城2期石垣の下層に斜めに走行する落込みを確認した。埋土の状態から堀とも考えられるが、深さは確認しておらず明確でない。

盛岡城1期の遺構は、現状の2期石垣の内側に埋め込まれた石垣と、根石1個が確認されている。そのうち、北西部の小納戸櫓の下層では石垣の残存が不良であったが、その痕跡から自然の転石を半ば包みこむように石垣が構築され、小規模な櫓台が突出していたことが推定できた。1期石垣の残存の良い箇所は、2期石垣の入隅に連続している。上部にいくほど大型の矢穴の入った割石が見受けられ、一部は2期に改修された可能性を持つ。

盛岡城2期は1期の石垣を埋め込み、地形を外側に拡張している。3期の末まで、この構造に変更はない。北東部と同様、小納戸櫓（SB140）の櫓台が明治の公園造成で改変されており、この櫓台の根石列が確認され、3間×4間（または4.5間）の平面規模が明らかになったほか、本丸御殿の北西部建物（SB107）が2期以上重複して確認された。礎石はすべて抜き取られていたが、新しい時期の建物は、幕末の「霊承院様御代大奥御住居図」の建物平面に近似する。同絵図によれば、検出された建物跡は南から仕舞所、御次、湯殿にあたる。

小納戸櫓の石垣の復元には明治期の石段を撤去して、発掘調査成果に基づき上面3間×4

間の櫓台を復元した。復元にあたっては、ハバキ石垣の石材を用いることとし、できるだけ矢穴が大きく、不定形に粗割された2期の石材に近い石材を選んで復元している。

iii) 南西部 (52・53頁第19・20図)

本丸南西部は、石垣上面の発掘調査と石垣上部の解体を平成10年度、石垣背面の解体と発掘調査を平成11年度、石垣下部の解体と発掘調査を平成12年度に実施している。なお、不來方城期の遺構については、この南西部では確認に至らなかった。

盛岡城1期は、現状の石垣から東に4メートル、北に11メートルの位置に古い石垣の南西隅が確認されている。石材は角石が粗割の花崗岩、築石が自然石の花崗岩が主体である。この石垣に続く面からは、腰曲輪縁辺部の木柵が確認されている。現状の3期以後の腰曲輪よりもかなり狭い。

盛岡城2期は、北東部・北西部と同様に1期の石垣を埋め込んで外側に盛り土し、曲輪を拡張している。3期にはこの構造をそのままとし、櫓台石垣を中心に積み直している。南西部でも、二階櫓(SB110)の櫓台が明治期に改変されて切り詰められ、石段が設けられていた。発掘調査では櫓台東側の基底部の抜き取り痕跡が確認され、二階櫓部分は2間×3間の規模があったことが確認され、この東側に続く石土居の内側石垣の根石列も確認されている。櫓との間には、石組みの暗渠排水と溝、櫓に続く御殿(SB109・111)の御次の間の礎石、渡り廊下の礎石の抜取跡が確認された。

石垣の下では腰曲輪の吹上門北側に小規模な門(SB425)の礎石が残存していた。層位から3期の終わりごろ(幕末期)の遺構である。

(2) 工事等に伴う発掘調査 (48頁第15図)

史跡指定地内では、公園施設等整備のために必要な措置に伴うもののほか、史跡の西側に所在する都市計画道路下ノ橋更ノ沢線拡幅工事に伴う調査。また、史跡隣接地においては、道路拡幅工事のほか個人住宅の建築・増改築、商業施設の建築等に伴う発掘調査が実施されている。

このうち、都市計画道路拡幅工事に伴う発掘調査では、史跡西側縁辺中央部において坂下門(川口門)の柱跡が、北西部では枡形門枡形の石垣の一部、旧北上川に面する曲輪の縁辺部では木柵の跡や船着場の石垣が確認されている。また、道路用地に所在した土蔵「彦御蔵」の移設先として、腰曲輪下南部の米内蔵跡の発掘調査を実施、敷石による地業面を確認している。

さらに、道路拡幅工事に伴う調査では、史跡隣接地(史跡南西側)において、内曲輪と出丸を画す堀跡や出丸南辺の土塁のほか、平安時代の集落跡が確認されている。

トイレ等をはじめとする公園施設の設置や維持・修繕等に伴う発掘調査は、三ノ丸、台所(多目的広場)で実施されており、三ノ丸では不明門跡のほか不來方城期の堀跡、台所では台所門枡形の土塁が確認されている。

史跡北西部では商業施設建築(Est21)に伴う発掘調査がおこなわれており、内堀の縁辺部が確認されている。



腰曲輪南東部（不來方城期の遺構）



腰曲輪南東部（盛岡城 1 期の木柵跡）



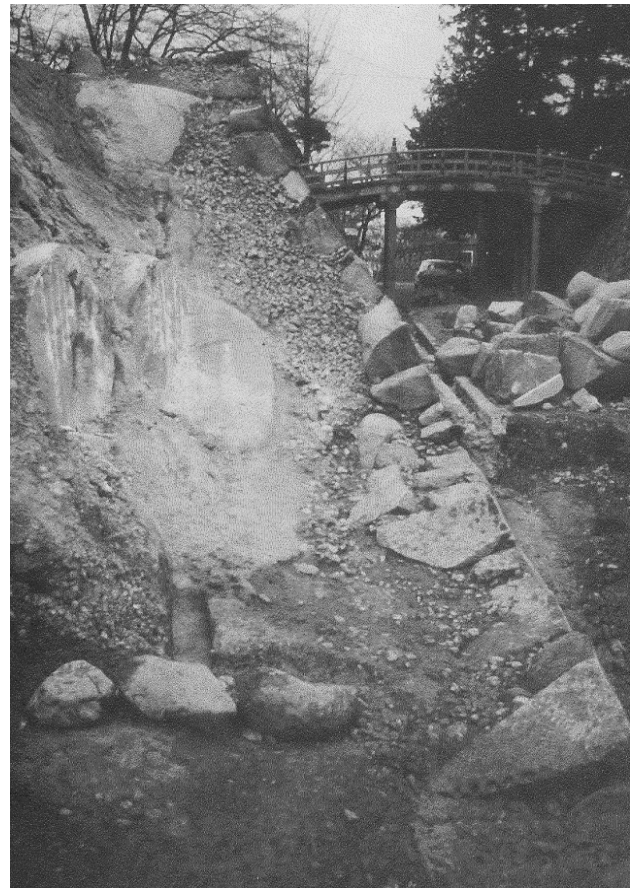
本丸北西部（御殿跡等遺構確認状況）



本丸南西部（盛岡城 1 期石垣確認状況）



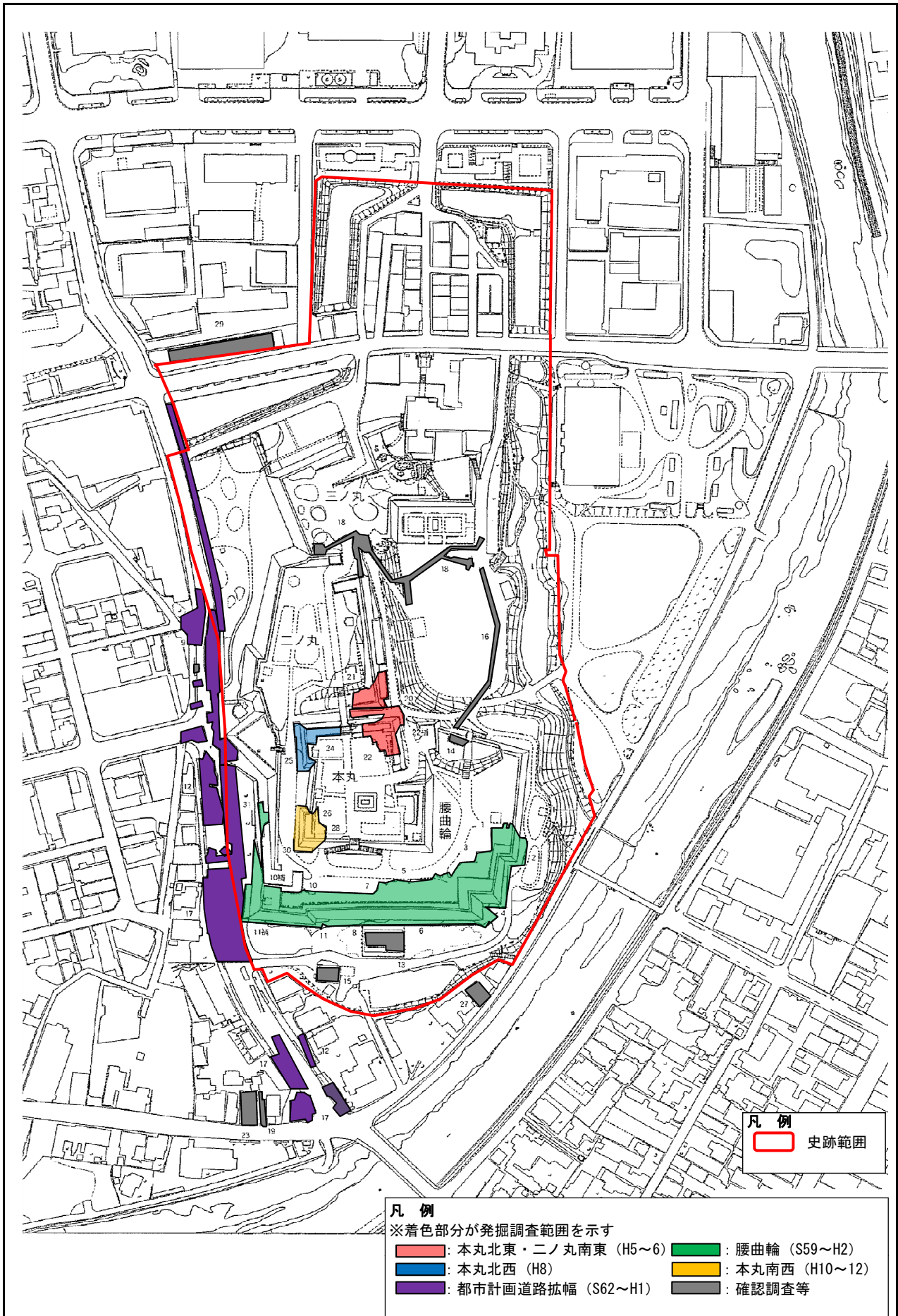
腰曲輪下南部（米内蔵基礎地業確認状況）



本丸北東部（盛岡城 1 期石垣確認状況）



腰曲輪下西部（坂下門周辺遺構確認状況）



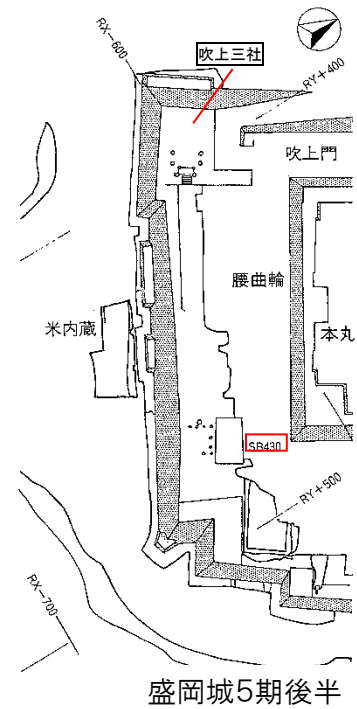
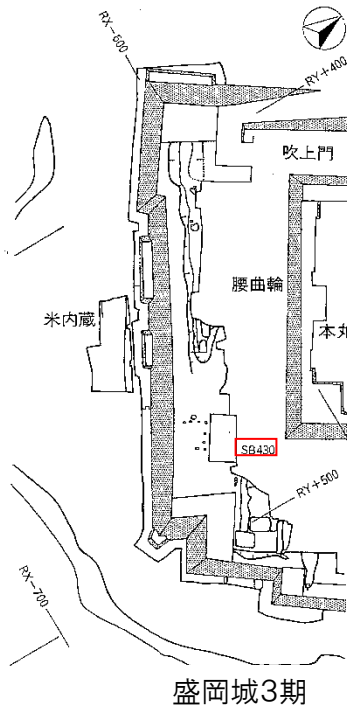
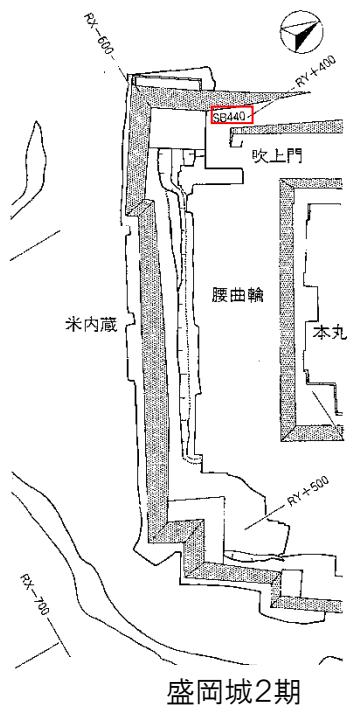
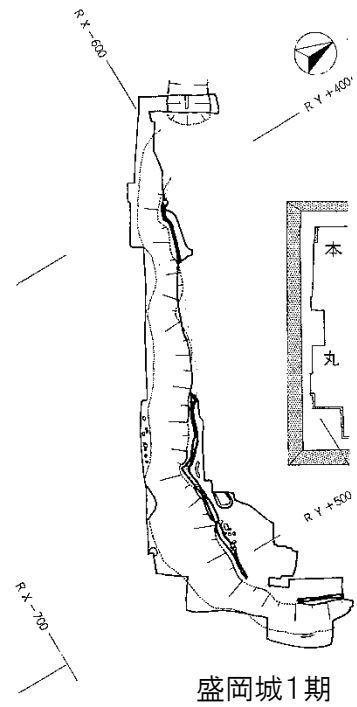
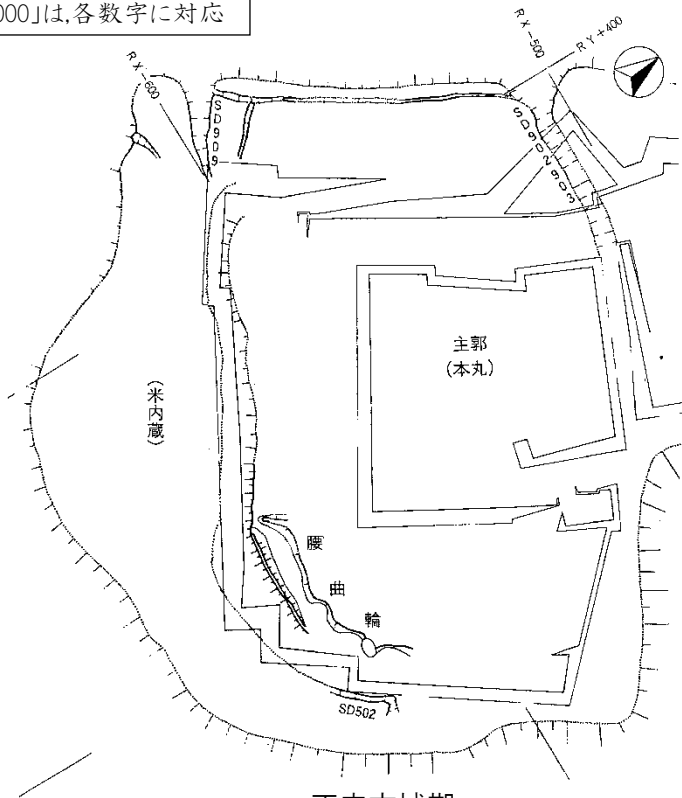
第15図 発掘調査実施箇所

【凡例】

SB-000 (建物跡)

SD-000 (堀跡)

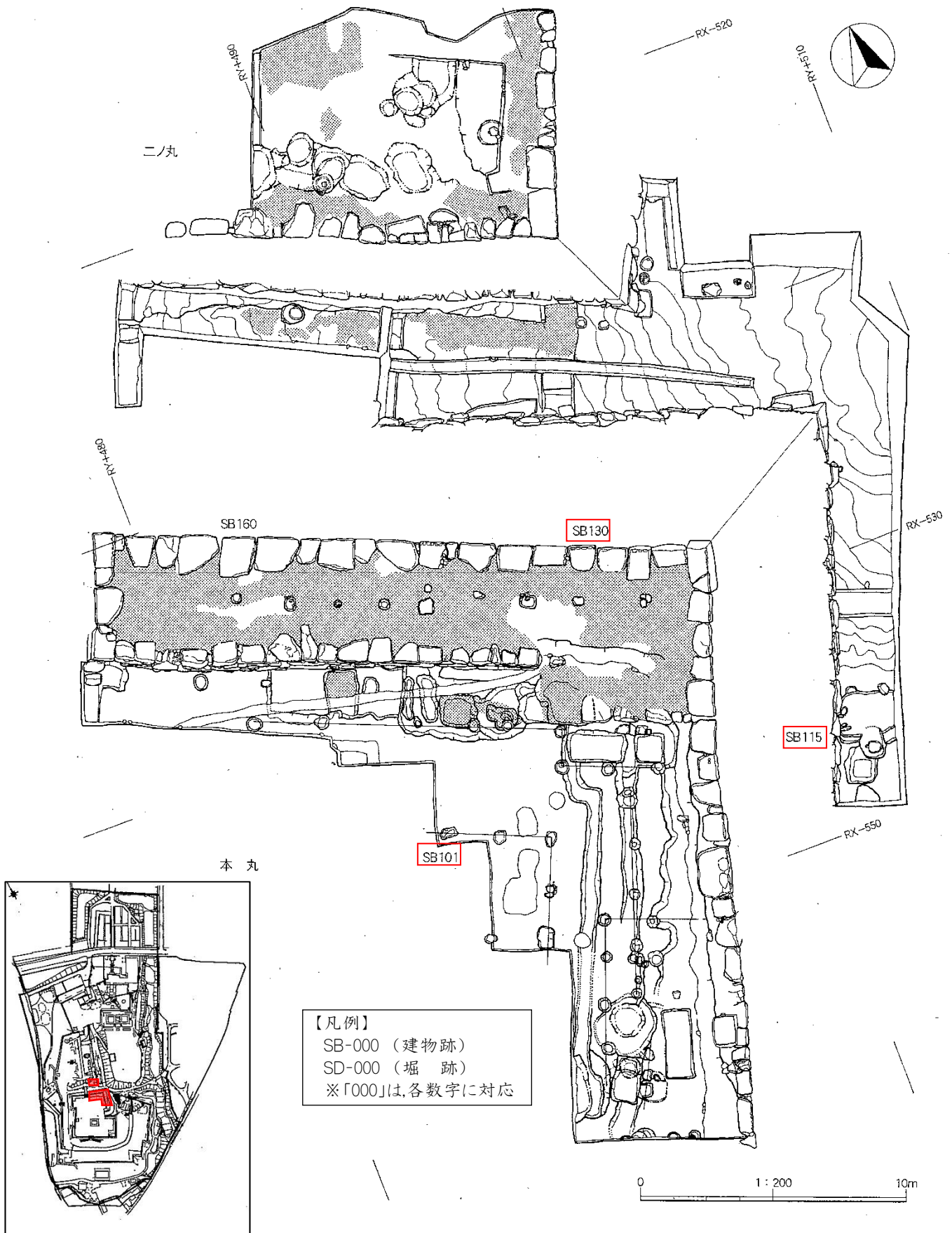
※「000」は、各数字に対応



0 1 : 2,000 80m

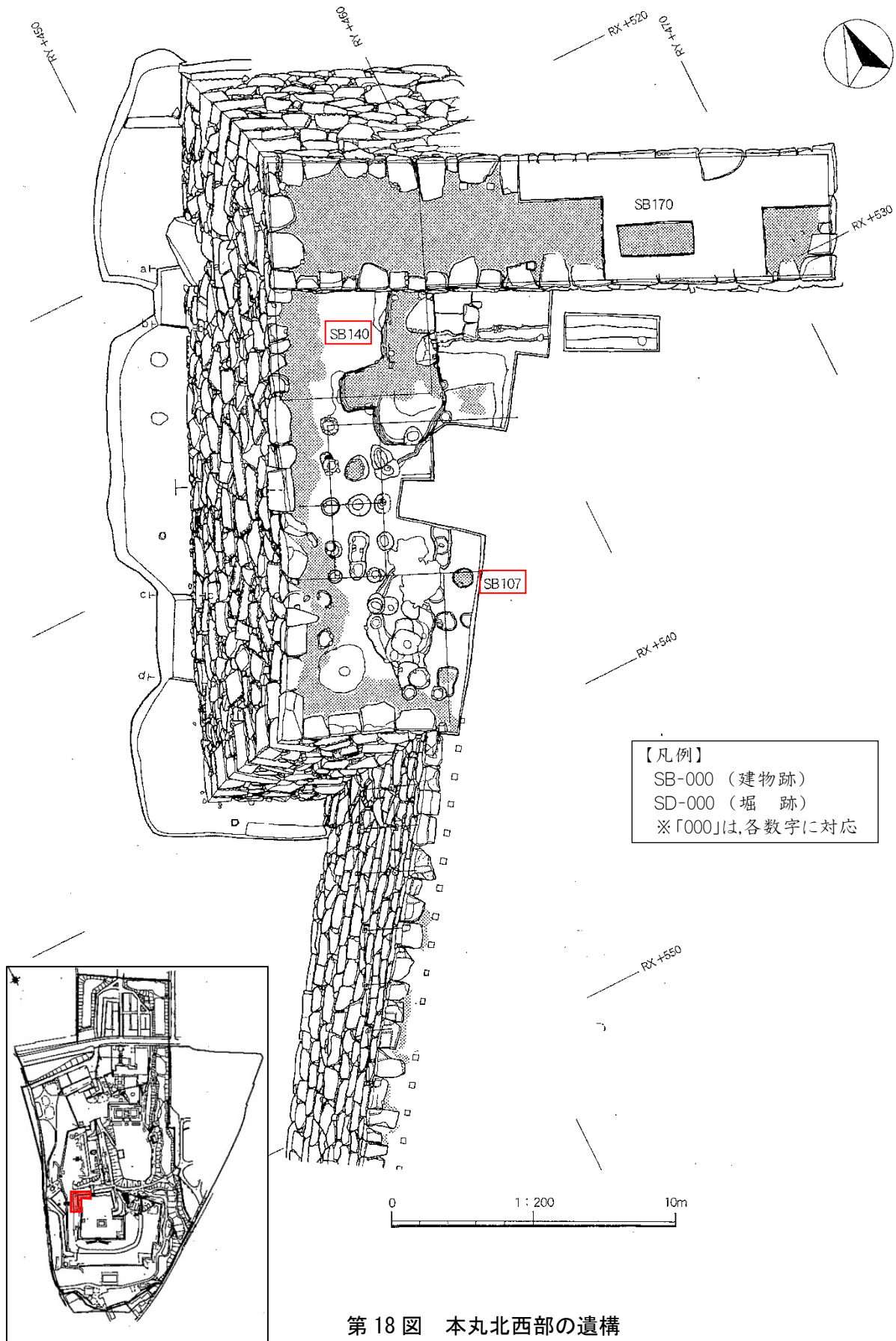
第16図 腰曲輪の遺構と変遷

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第2期保存整備事業報告書- (2008.3) より転載



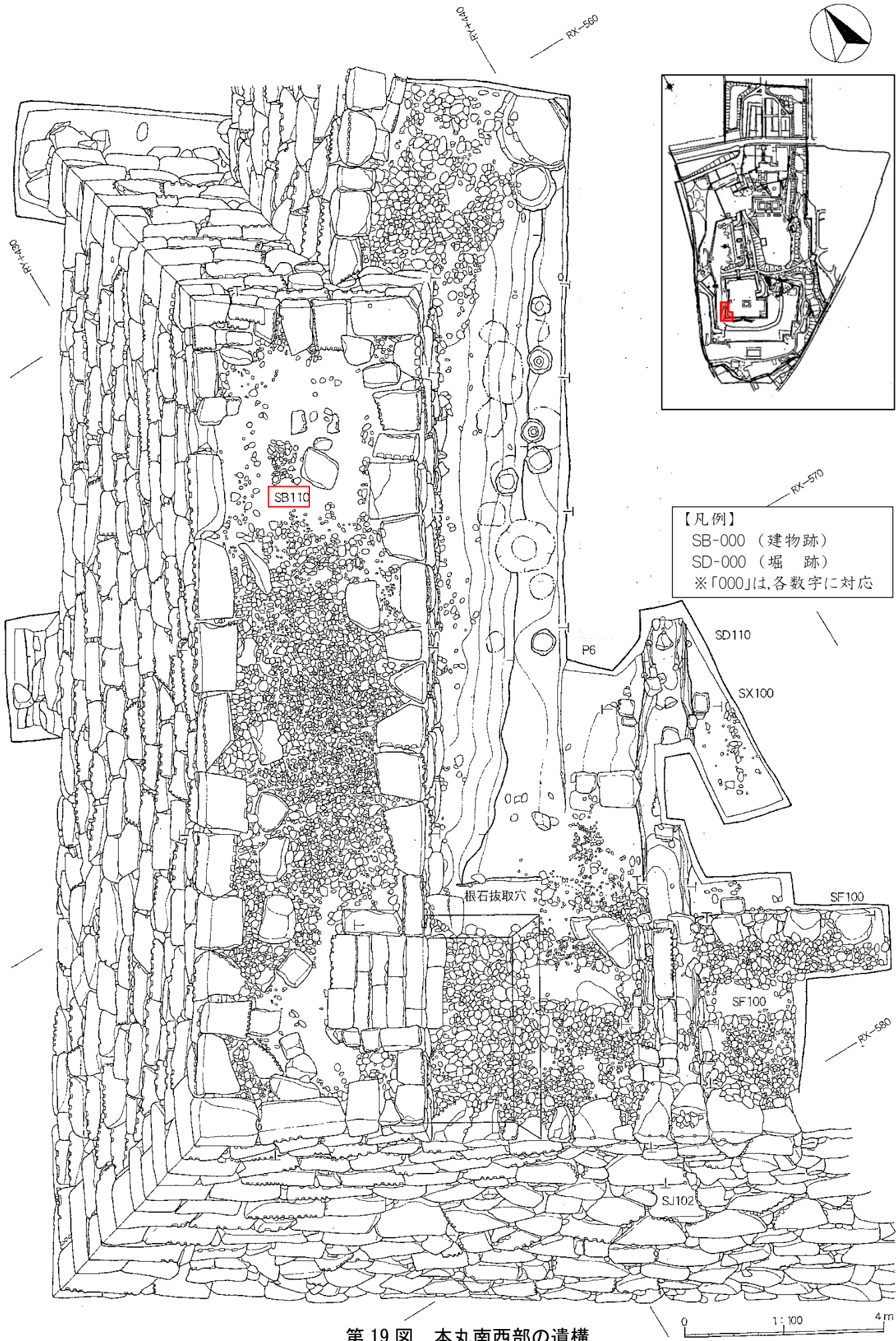
第17図 二ノ丸南東部（上），本丸北東部（下）の遺構

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第2期保存整備事業報告書-（2008.3）より転載



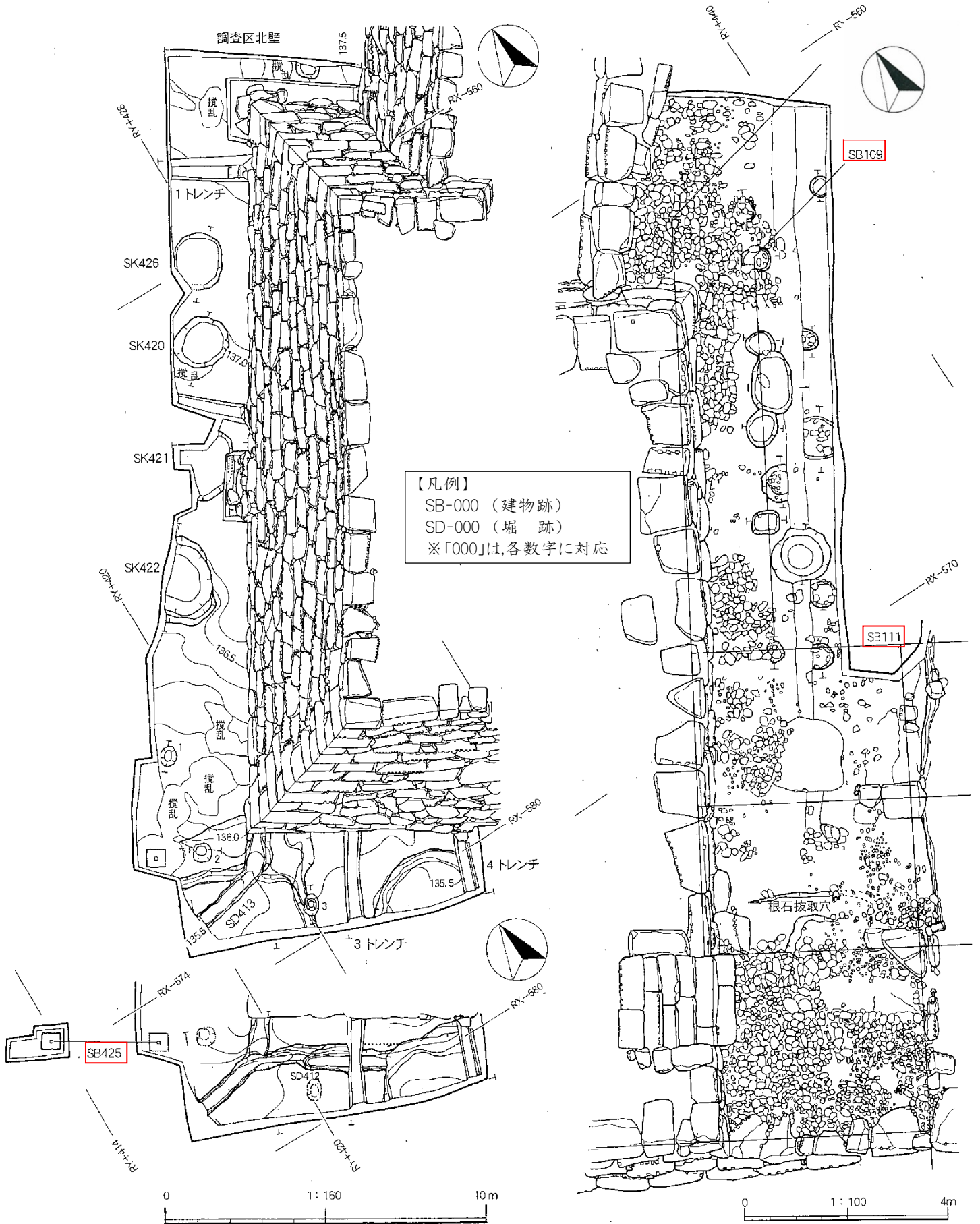
第18図 本丸北西部の遺構

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第2期保存整備事業報告書-(2008.3)より転載



第19図 本丸南西部の遺構

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第2期保存整備事業報告書-(2008.3)より転載



腰曲輪西側(本丸南西部下)の遺構

本丸南西部の遺構(本丸御殿ほか)

第20図 本丸南西部・腰曲輪西側の遺構(部分)

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第2期保存整備事業報告書-(2008.3)より転載

6. 保存整備事業

(1) 石垣修復工事の実績と計画（表8，55頁第21図）

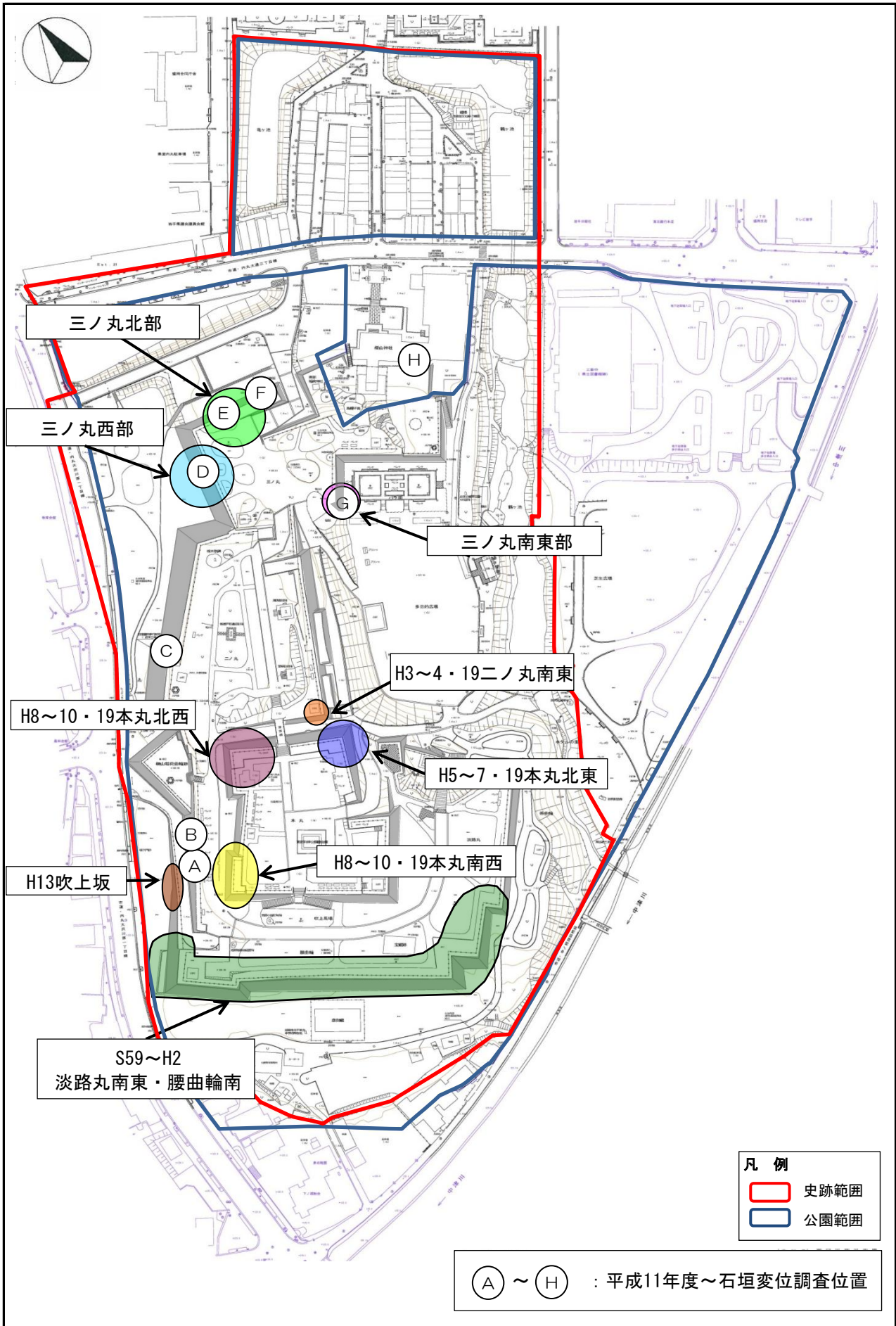
石垣修復工事は、石垣の解体修理工事を石垣の損傷（孕みなど）の大きな場所を中心に年次計画で進められており、今後は、三ノ丸南東部、北部、西部の3箇所について実施する計画である。規模にもよるが、これまでの石垣修理に伴う一箇所あたりの工事期間は3～6年間であることから、修理が完了するまでには、長期間が必要となる見通しである。

修理工事の際には、これまでの工事期間中と同じように工事範囲はもちろんのこと、多目的広場等が石材置場等となるために封鎖されることが懸念され、市民の公園利用に大きな影響を及ぼすことが想定される。

さらに、石垣修理を計画している箇所以外にも石垣の孕みが認められる箇所があるが、現在実施している変位調査の計測地点を増やし、計測の結果崩落の兆候がみられる範囲についてのみ、必要最低限の修理工事を実施するなど、長期にわたる石垣修復計画を検討することが必要である。

表8 史跡盛岡城跡保存整備事業の実績

期	年次	年度	修理箇所	石垣修理			測量調査等		発掘調査他		計	備考
				解体(m ²)	復元(m ²)	金額(千円)	面積(m ²)	金額(千円)	面積(m ²)	金額(千円)		
第1期	1	59	淡路丸南東	222.1	199.2	27,000	294.0	0	293.0	0	27,000	
	2	60	淡路丸南東	761.3	350.4	65,703	1,816.0	10,247	640.0	2,700	78,650	
	3	61	本丸腰曲輪南	331.0	522.0	63,374	1,594.0	9,220	1,062.0	5,400	77,994	
	4	62	本丸腰曲輪南	394.0	340.0	49,804	846.0	8,596	300.0	1,600	60,000	
	5	63	本丸腰曲輪南	452.7	381.0	56,841	1,028.5	7,159	1,200.0	6,000	70,000	
	6	元	本丸腰曲輪南	558.0	370.0	62,766	383.0	6,223	861.0	3,014	72,003	
	7	2	本丸腰曲輪南	0.0	350.0	35,918	807.0	9,682	0.0	0	45,600	
			小計	2,719.1	2,512.6	361,406	6,768.5	51,127	4,356.0	18,714	431,247	
第2期	8	3	(二の丸南東)	0	0	0	430.0	23,000	140.0	1,000	24,000	
	9	4	二の丸南東	99.0	99.0	20,157	290.0	4,343	249.0	2,000	26,500	
	10	5	本丸北東	319.0	0.0	29,685	463.0	7,315	489.0	3,000	40,000	
	11	6	本丸北東	40.0	15.0	10,301	(定点観測)	4,469	79.0	630	15,400	
	12	7	本丸北東	0	286.0	52,940	214.0	7,060	0.0	0	60,000	
	13	8	本丸北西	225.0	227.2	63,564	564.0	14,646	327.0	2,590	80,800	
	14	9	(本丸北西)	0.0	0.0	0	187.0	4,560	0.0	0	4,560	
	15	10	本丸北西・南西	53.7	25.7	13,472	1,488.0	18,816	186.0	3,712	36,000	
	16	11	本丸南西	196.4	0.0	24,746	変位調査のみ	630	192.0	4,624	30,000	
	17	12	本丸南西	24.6	65.6	14,385	560.0	7,823	330.0	3,792	26,000	
	18	13	本丸南西・吹上坂	70.4	86.2	22,215	598.0	5,733	109.0	1,052	29,000	
	19	14	本丸南西	0.0	55.9	10,107	変位調査のみ	893	0.0	0	11,000	
	20	15	本丸南西	0.0	58.5	10,083	変位調査のみ	871	指導旅費	46	11,000	
	21	16	本丸南西	0.0	12.1	4,377	変位調査のみ	830	指導旅費・ 資料整理費	253	5,460	
22	17	(本丸南西)	0.0	0.0	0	240.0	3,145	資料整理費	205	3,350		
23	18	(三の丸南東)	0.0	0.0	0	300.0	2,992	資料整理費	148	3,140		
24	19	(二の丸・本丸)	0.0	0.0	0	変位調査のみ	934	修理報告書	3,992	4,926		
			小計	1,028.1	931.2	276,032	5,334.0	108,060	2,101.0	27,044	411,136	
第3期	25	20	—	0.0	0.0	0	変位調査・遺構 説明板	1,943	—	57	2,000	
	26	21	—	0.0	0.0	0	変位調査・遺構 説明板	1,972	—	0	1,972	
	27	22	—	0.0	0.0	0	変位調査・遺構 説明板	1,795	—	0	1,795	
			小計	0.0	0.0	0	0.0	5,710	0.0	57	5,767	
合計				3,747.2	3,443.8	637,438	12102.5	164,897	6,457.0	45,815	848,150	



第21図 史跡盛岡城跡保存整備事業計画図

(2) 石垣変位調査 (55 頁第 21 図)

①石垣移動量調査・石垣変位調査

築城から 400 年以上経過した盛岡城跡の石垣は随所で孕みや陥没が進行し、腰曲輪南面や本丸東側、二ノ丸東側等で石垣の傷みが著しく、崩落の危険性が指摘されたことから、石垣修理を行うと共に、孕みや陥没の要因・構造を明らかにする必要性が生じてきた。このことから、文化財としての石垣を対象としたものとしては国内初の試みとして、昭和 60 年度から平成 10 年度にかけて、三ノ丸西側石垣の石垣移動量調査を実施した。

この調査は、H 鋼の不動梁を石垣に寄りかける形で縦方向に設置し、石垣の部材 8 個を変位計やひずみ計で連結し、石垣石材の動きを 24 時間、365 日自動観測するとともに、精密測量による定点観測、沈下板の水準測量等もおこなったものである。

なお、石垣移動量調査の成果については、盛岡市・盛岡市教育委員会 (2000) 『史跡盛岡城跡石垣移動量調査報告書』を参照されたい。

石垣移動量調査は、石垣の局所的な挙動を把握するには有効であったが、調査方法・規模等において、おのずと範囲が限定されるため、城跡全体の石垣の変位状況を把握するには不向きであった。そこで、平成 11 年度より城跡全体の石垣変位状況を把握するとともに、修理の優先順位の検討材料とすること等を目的として、ミクロン・ストレインゲージによる定期的な計測調査を実施することとした。

この調査は、隣り合う石垣同士の石材面に、金属製チップを貼付け、ゲージを用いて 2 点間の距離を測定するとともに、部分的に角度の変化を計測するものである。

計測は月 1 度を基本とし、震度 3 以上 (観測地点：盛岡市山王町・馬場町) の地震が観測された場合には、その都度目視による現地確認をおこなうとともに、追加計測調査を実施している。

なお、平成 19 年度までの調査成果については、盛岡市教育委員会 (2008) 『史跡盛岡城跡Ⅱ－第 2 期保存整備事業報告書－』を参照されたい。

②石垣変位調査成果の概要 (57～58 頁表 9)

調査箇所については、目視により石垣の孕みや陥没、ひずみ等が著しいことが確認された 8 地区 (当初 7 地区) を選定し、観測を実施した。

多くの計測点では、季節の変化による温度差等による周期的な変動とみられるものがほとんどで、拡大と収縮を繰り返しているが、一部には変位の累積や地震による急激な変動が認められる箇所も存在している。

近年では、平成 20 年 (2008) 7 月に震度 5 を観測した岩手県北部地震により、いくつかの計測点で顕著な変位が確認され、その後も継続して変位の累積が確認された箇所が存在したが、平成 21 年度の計測では、その変位の累積はほぼ収束していることが確認された。

その後、平成 23 年 (2011) 3 月 11 日に発生し、震度 5 強を観測した東北地方太平洋沖地震においては、いくつかの地点で微小な変位が確認されたが、平成 20 年 7 月の地震時よりも小さい変位量であり、これまでの変位の傾向を逸脱するほどのものではないことが確認された。

しかし、平成 23 年 4 月 7 日に発生し、震度 5 弱を観測した東北地方太平洋沖地震の余震の際

には、三ノ丸北側、北東側で比較的大きな変位が計測された。この範囲については、過去の大きな地震でも比較的大きな変位が確認された箇所であることから、変位の進行・加速の有無を注視するとともに、現在の計測点では把握しきれない挙動監視のため、計測点を増やして観測をおこなうこととした。

なお、地震とは関係なく、年に1ミリメートル未満の小さな規模ではあるが、変位が継続して累積している計測点があることから、今後も変位の累積が加速することがないかどうか、十分に注意して観測を行っていく必要がある。

表9 石垣変位調査結果概要（平成23年4月現在）

地区 (調査位置)	観測 箇所	観測開始 年次	観測結果概要
A地区 (腰曲輪西)	8	平成13年度	一部で震度4以上の地震が多発した平成15～16年にやや顕著な変位が始まり、平成18年始めまでに累積変位量は1mm程度みられた。 その後は、まれに特異値が見られるものの、変位の累積は認められない。
B地区 (腰曲輪西)	7	平成11年度 (平成18・23年度 に測点追加)	大半については、過年度観測結果と大きな変化はないが、0.1mm/年程度の変位の累積傾向を示している。 部分的には、震度4以上の地震が多発した平成15～16年にかけて、0.2mm～0.5mm程度の変位の累積が見られた。その後、変位の累積が継続し、現在までに0.5mm程度の変位が累積している。
C地区 (二ノ丸北西)	3	平成11年度	全体的な観測結果としては、大きな変化は見られないが、部分的に、震度4以上の地震が多発した平成15年頃から変位の累積がわずかながら見られ、現在までに0.5mm程度の累積がみられる。 また、一部で0.05mm/年程度の累積傾向がみられる箇所も確認されている。
D地区 (三ノ丸北西)	5	平成11年度	全体的な観測結果としては、大きな変位は認められていないが、平成13年から断続的に変位が累積している箇所がみられ、震度4以上の地震が多発した平成15年の終わりまでに-0.2mm～0.8mm程度の変位の累積が確認されている。その後、変位速度は落ちながらも変位の累積は継続していることが確認されている。 また、一部では間詰石の動きによるものと思われる突発的な変位を観測する箇所も見られる。

<p>E地区 (三ノ丸北)</p>	<p>8</p>	<p>平成11年度 (平成14・18・23 年度に測点追加)</p>	<p>観測当初から継続して変位が累積している。変位速度は現在までほぼ一定であるが、大きな地震の都度、比較的大きな変位が観測されている地区で、変位量の大きい箇所における観測開始時から現在の累積変位量は9.5mmである。 最近の観測結果では、平成23年4月7日の余震の際に、部分的ではあるが最大1.7～2.1mmの比較的大きな変位を確認している。</p>
<p>F地区 (三ノ丸北)</p>	<p>3</p>	<p>平成11年度</p>	<p>全計測点で、平成15年5月27日に発生した震度5の地震から微小な変位の累積が連続して発生している。現在までの変位の累積は0.5～0.8mmである。 最近の観測結果では、過年度と大きな変化はなく、全箇所でも0.05mm/年程度の変位の累積傾向を示している。</p>
<p>G地区 (三ノ丸南東)</p>	<p>5</p>	<p>平成11年度 (平成23年度に測 点追加)</p>	<p>当地区において変位の累積傾向が顕著な観測点は角石の上部である。この部分については概ね春に伸長するような変動傾向を示し、観測開始から現在までに約2.4mmの変位の累積が認められている。 さらに、地震の度に変位の傾向を変化させる箇所も観測されている。 その箇所については、平成15年5月27日に発生した地震を境に、変位量が累積傾向にあったものが、ほぼ変位のない状態となり、平成20年7月24日の震度5の地震を境に再び変位の累積が見られるようになるが、平成21年4月からは変位が観測されないという結果が得られている。 なお、その他の観測点については、変位が微小ながら累積しており、現在までに0.7～1.6mmの変位の累積が確認されている。</p>
<p>H地区 (三ノ丸北東)</p>	<p>2</p>	<p>平成11年度 (平成23年度に測 点追加)</p>	<p>地震により一時的に大きな変位が発生するが、その他の期間では変位の累積は認められない。 平成15年5月27日に発生した震度5の地震の際、1mm～2.5mmの拡大が見られ、平成20年7月24日に発生した震度5の地震においても、0.2mm～0.6mmの変位の進行が認められた。 また、平成23年4月7日の余震の際には、部分的に最大0.5mmの比較的大きな変位を確認している。</p>